

ピーマンのハイワイヤー養液栽培による主枝の誘引本数

摘心・つり下げとともに、2本仕立てにより2.5t/a以上の収量が得られます。

背景・目的

- トマト等では、ハイワイヤー・養液栽培による多収化技術が確立されており、ピーマンでも同様の技術確立が求められています。そこで、2.5t/aを目標にハイワイヤー養液栽培（図1）における主枝の誘引本数を検討しました。

成果の内容

- 摘心栽培、つり下げ誘引栽培ともに、主枝を株当たり2本とし、株間25cmとすることで、目標である2.5 t/aを超える収量が得られます（表1）。
- 4月までの着果数は同様に推移しますが、5月以降は摘心栽培で高く推移します（図2）。

表1 収量調査結果

	A品				可販果(A品+B品)			可販果率 (%)	総収量 (kg/a)
	果数	収量 (kg/a)	一果重(g)	A品率(%)	果数	収量 (kg/a)	一果重(g)		
摘心2本	74,080	2,172	29.3	66	102,400	2,852	27.9	87	3,282
摘心4本	63,280	1,867	29.5	66	88,340	2,391	27.1	84	2,839
つり下げ2本	70,890	2,101	29.6	73	89,580	2,568	28.7	89	2,882
つり下げ4本	58,380	1,712	29.3	70	75,690	2,121	28.0	87	2,435

「摘心」は、1回目の主枝の摘心を11/29に行い、以降適宜主枝を摘心する摘心栽培とした。「つり下げ」は、主枝を摘心せず、11/29から主枝を下ろし右側に移動させ、斜めに誘引するつり下げ栽培とした。2番花まで摘花し、1次側枝は強い枝を3節止めとし、収穫後1節を残して切り戻し、2次側枝以降も同様に管理。摘心2、4本は慣行の栽培と同様に3月以降の整枝の程度を弱くした。

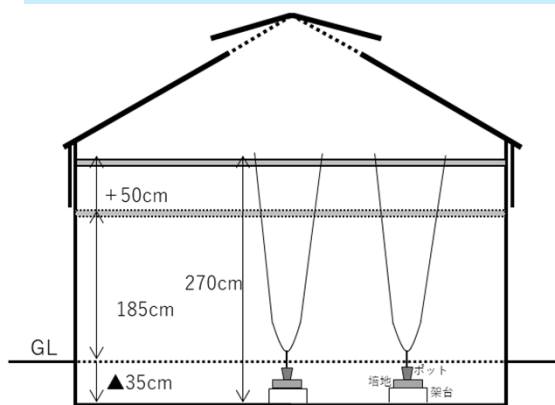


図1 栽培ハウスの概要

栽培ハウスは35cm掘り下げ、誘引ブレースを50cm引き上げ、185cmの誘引位置を270cmに拡大した。

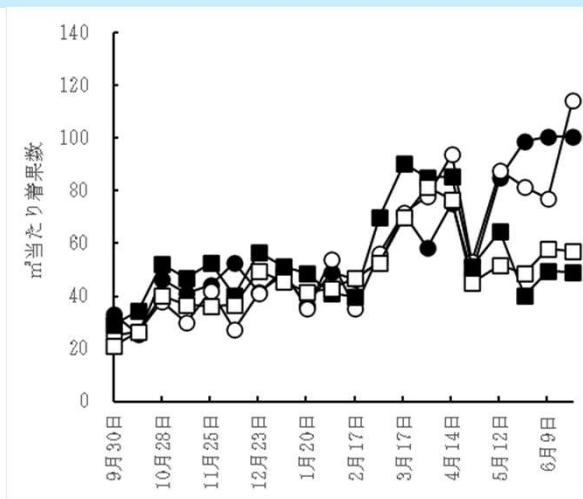


図2 着果数の推移

成果の活用方法(又は期待される効果)

- ピーマンの大規模経営に向けた参考データとなります。
- 普及対象地域・面積 県内促成ピーマン産地約210ha

留意点

- 総合農業試験場内硬質プラスチックハウスでの炭酸ガス施用や温湿度管理条件における単年度成果となります。栽培期間：2021年9月2日～2022年7月31日

関連研究成果カード：2022年度後期 番号6、関連事業名：生産性向上に向けたピーマンハイワイヤー栽培技術の確立（県単）
研究期間：2019～2023年度